

# 日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL. 03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



## 参院選 9党党首討論会 6月21日 10階ホール

自民、民進、公明、共産、おおさか維新、社民、生活、こころ、改革の9党党首が一堂に会した

撮影：笠原 克生（ガンマプレス）

### 国政選挙の「党首討論会」 時代への適応も課題に

国政選挙の公示日前日に各政党代表者による「党首討論会」を開くのは、日本記者クラブとして重要な仕事だ。今回の参院選でも9党の代表が参加した。前半が党代表者同士による質疑応答、後半が当クラブ企画委員各社のベテラン記者が各党代表に切り込む2部構成になっている。今回もさまざまな論点について時に白熱した議論が展開され、公示日にあたる翌日の新聞各紙はこの討論会を詳報する記事で埋まった。

ただ気になったこともあった。前半部分で、安倍首相と連立相手の公明党・山口代表が相互に相手を指名して質問したが、これは異論をぶつけ合う「討論」というより、PRの機会を互いに与えあっている印象を受けた。

また、各党代表者の「そろい踏み会見」は当初は当クラブだけだったが、今はネットや民放各局など複数回行われ、独自性が薄れてきた面もある。

党首討論会が始まったのは、1990年。この時の参加政党は5党。まだ「自民対社会」の保守対立構造が存続していた時代だった。それが、今や、自民一強、改憲派野党の登場など当時とは政治状況が激変している。

国政選挙前に政党代表者たちの本音に迫る会見の意義は依然、大きい。現状に適応した当クラブならではの国政選挙の会見はどうあるべきか。それを模索する時期かもしれない。

（土生修一）

参院選 9党党首討論会特集 3・5

クラブゲスト 6・8

浅川雅嗣・財務官／奥山俊宏・朝日新聞編集委員、澤康臣・共同通信特別報道室次長／仲谷栄一郎・弁護士／武内和彦・国連大上級副学長／平原弘子・国連南スーダン派遣団ベンティウ事務所長／フィラデルフィア管弦楽団／榛沢和彦・新潟大医師／堀坂浩太郎・上智大名誉教授／野上義二・元駐英大使／横江公美・元米ヘリテージ財団上級研究員／村木真紀・虹色ダイバーシティ代表／江戸城天守を再建する会／野口元郎・ICC被害者信託基金理事長／H・クラーク・UNDP総裁／吉川洋・財務省財政制度審議会会長／米川正子・立教大特任准教授、華井和代・東大大学院特任助教／柳興洙・駐日韓国大使／中国海洋問題専門家／小城武彦・日本人材機構社長／森重昭さん／原田謙介・YouthCreate代表／松田康博・東大教授／阿部菜穂子・英国在住ジャーナリスト／A・レリス・仏ジャーナリスト／平田直・東大地震予知研究センター長／民間税制調査会

会見リポート

研究会「パナマ文書」 9  
堀坂浩太郎・上智大名誉教授／ヘレン・クラーク・UNDP総裁 10  
柳興洙・駐日韓国大使／中国海洋問題専門家 11  
森重昭さん／アントワープ・レリス・仏ジャーナリスト 12  
日本記者クラブ賞受賞記念講演会 13

記者ゼミ GIS入門 14

試写会「シアター・プノンペン」 14

ワーキングプレス 15・16

英EU離脱 国民投票 朝日新聞社 梅原季哉  
舛添都知事辞職 フジテレビ 清水正樹

被災地通信 17

熊本地震 テレビができることを見つめて 熊本朝日放送 矢島 誠

書いた話書かなかった話 18・19

赤道直下、密林と原野の南スマトラを歩く一熱帯農業開発に挑んだ日本人たちのたたかい 柴崎信三

リレーエッセー 20

三陸臨時支局を支えた ホテル女将の田村恭子さん 龍崎

マイBOOKマイPR／会議報告 21

## 8月に記者研修会、中国取材団も派遣 夏も幅広く活動、積極的な参加を

記者会見の企画運営は日本記者クラブの活動の大きな柱だが、近年は、記者研修やプレスツアーにも力を入れていく。地理的な制約で記者会見に出席困難な東京以外の会員社にも会員メリットを実感してもらえれば幸いだ。

### 記者研修、小泉進次郎氏も登場

記者研修は、地方紙、地方局も含めた会員社の中堅・若手記者を対象にして毎年夏に実施しており、今年が19回目となる。

今年の日程は8月25、26の両日で、会場は当クラブのある日本プレスセンタービル。現時点で予定されている内容は以下の通り。

#### ▼8月25日(木)

◇大野恒太郎検事総長との昼食会  
(取り調べの可視化などの検察改革について)

◇パネルディスカッション「原発報道・再稼働、廃炉、核ゴミ処理を考える」(原発立地県である福井新聞、愛媛新聞、南日本新聞、福島中央テレビの記者がパネリストとして参加)

◇菊池由貴子・大槌新聞代表(菊池さんは、被災地の岩手県大槌町で手作り新聞を2012年6月から一人で発行、執筆している)

#### ▼同26日(金)

◇韓国大使館訪問(港区南麻布にある韓国大使館を訪問し、大使か公使のスピーチと質疑応答など)

◇中村哲・ペシヤワール会現地代表(アフガニスタンで長年にわたり援助活動を続ける医師)

◇小泉進次郎・衆院議員(記者会見への登場はみれだが、今回は記者研修ということで申し入れを受けてくれた)

◇「パナマ文書報道をめぐって」(「国際調査報道ジャーナリスト連合」の依頼を受け、協力してパナマ文書の解説にあたった奥山俊宏・朝日新聞編集委員、澤康臣・共同通信特別報道室次長が自社以外との記者連携のあり方について語る)

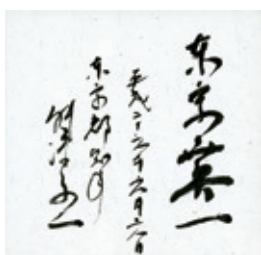
25日夜は参加者による懇親会も予定。なかなか交流する機会がない全国各地の同年代の記者たちが知り合える貴重なチャンスになるので、各社とも積極的なご参加をお待ちしています。

### 中国経済の実情を現地取材

次に海外プレスツアーの募集です。今回は「新常态の中国経済」をテーマに、8月に瀋陽、鞍山(遼寧省)、杭州(浙江省)などを訪れ、中国経済の実情を現場で取材する。鞍山では製鉄所やハイテク産業開発区の視察、杭州ではアリババ集団本部幹部との会見などを予定しており、交渉を進めている。中国経済の動向は、日本のあらゆる地域にとって無縁ではない。また中国や経済の専門でなくとも、中国での取材体験は記者としての「財産」になります。こちらも、ふるってご参加ください。

両行事とも各社の編集・報道責任者に案内・申込書をお送りします。(専務理事 土生修二)

#### ●読めますか？



正解は「東京世界一」

この時の会見(2014年6月)では、揮ごうの説明を求められ、舛添氏は「6年後に必ずこう(東京世界一)したい」と笑顔で語っていたが…。

# 参院選 9党党首討論会(6・21)



討論会に臨む(左から)荒井広幸・新党改革代表、小沢一郎・生活の党と山本太郎となかまたち代表、片山虎之助・おおさか維新の会共同代表、山口那津男・公明党代表、安倍晋三・自由民主党総裁、岡田克也・民進党代表、志位和夫・日本共産党委員長、吉田忠智・社会民主党党首、中山恭子・日本のこころを大切に

司会・代表質問を終えて—企画委員—

■第2部に工夫の必要を痛感 第2部の司会役をしながら、今回も悩まざるを得なかった。どうしても現職首相に質問が集中してしまう。不公平さが避けられないからだ。参院選の最大の争点は「安倍政治」の是非にあるのだから、それもやむを得ないと割り切ることにしたが、課題は残った。ひとつのやり方として、第2部に相当するものを1回だけではなく何回かに分けて、テーマごとに議論を深めていくということを考えていいのかもしれない。今回、自衛隊に対する共産党志位さんの率直な対応が印象に残ったが、党首討論の成否の鍵が、各党首が正直に訴えてくれることにあり、そのための工夫が記者側に求められていることも痛感した。

読売新聞社特別編集委員 橋本 五郎

## 伊藤芳明理事長のあいさつ



日本記者クラブ主催の党首討論会は今回で15回目、参院選では6回を数えます。この参院選から選挙権が18歳に引き下げられますが、報道によれば、若者たちは決して政治に対して無関心なのではなく、よくわからないから行くことに躊躇し、後ずさりしているようです。この討論会で彼らを含め有権者の皆さんに、1つの判断基準、機会を提供できれば主催者としてうれしく思います。ぜひ活発な討論をお願いいたします。

## ■果実かリスクか 「アベノミクス」の果実

という数字の「虚」を突きたかった。例えば、税収21兆円増は、リーマンショックと3・11で最悪の状態にあった12年度比であり、第1次安倍内閣の07年度比ではほぼ同額である(つまり増えていない)こと、また、景気動向調査によると、第2次安倍内閣の発足は景気の谷底から上昇する切り返しに重なっており、アベノミクスが全てのプラスを作り出したとの言い方は誇大広告だ、と指摘した。と同時に、アベノミクスの陰の部分、国債管理上のリスクについても質した。首相から倍近い時間を掛けての反論をいただいたが、「バラ色ミクス」には一矢報いたのではないか。

毎日新聞社論説室専門編集委員 倉重 篤郎

## ■聞く側の力量も試される かつての政治家

もこんな感じだっただろう。いや、こまでひどくはなかった——。経済でも、憲法でも、安全保障でも、あらかじめ決めた答弁を繰り返す政治家の姿勢のことだ。とりわけ与党の側にその傾向が強く感じられる。良く言えば安全運転。悪く言えばその場しのぎ。それを突き崩すことこそ、聞く側の力量なのだろう。だが、代表質問初挑戦のわが身、聞くべきことを聞くことに徹するほかなかった。消費増税延期で削る社会保障の身を選挙前に説明すべきだ、日米地位協定の改定を米側と話し合うべきだ、この2点はぜひ与党首脳に聞きたかった。予想どおり、踏み込んだ答弁は聞けなかったけれど。

朝日新聞社論説副主幹 恵村順一郎

■**財政健全化策はあいまいのまま** 消費税の増税は先送りする一方、社会保障では充実策もどんどん進める。高齢化で社会保障費は今後ますます膨らむのに、どうやって財政を健全化していくのか。その質問に安倍首相からは満足のいく回答は得られなかったが、本当は甘い公約を並べる全ての党首に聞きたかったポイントだ。アベノミクスの核であったはずの成長戦略について安倍首相は電力自由化と農業改革の成果を強調したが、これで十分とはいえない。ただ、ほかの党首からこの点を厳しく質す声はなかった。アベノミクスの恩恵拡大も重要だが、長い目で潜在成長力を高める策がどの党首からも聞かれなかったのは残念だ。

日本経済新聞社論説副委員長 実 哲也

■**「赤ランプ」に効用あり?** 第1部の9党首の発言機会は、冒頭のボードを掲げての所信表明に質問&答えのやりとり2巡を加え、合計45回だった。1回につき1分という発言時間制限を知らせるランプに初めて「赤ランプ」を採用。その点滅に各党首が反応して、整然とした討論になった。従来は首相にばかり質問が集中することが多かったが、今回は安倍首相の発言が合計で13回、岡田代表が7回、山口代表が5回、志位委員長が4回で、この方式が徐々に定着してきたと感じた。主な争点とするテーマに与党と野党でずれ違いもあったが、選挙モードを加速させる日本記者クラブの役割は果たせたと思う。

NHK解説副委員長 島田 敏男

## 会場の目・記者の声

ウェブサイトには討論会全文と動画

■**舛添氏を辞職に追い込んだ庶民の怒りに鈍感** 参院選に臨む各党首は、舛添氏への怒りの渦の正体に気づき、その対応策に言及すると思っていた。しかし、おおさか維新の会の片山虎之助共同代表が党の方針を説明しただけに終わった。経費削減の日々を生きる庶民は、血税を湯水のごとく使う、その盗つ人根性に我慢がならない。国であれ、自治体であれ、公費の使い方が問われるし、政治資金の使途に法律上の制限がないのも問題だ。下々の怒りへの反応が鈍いと、エスタブリッシュメントへの不信が広がり、民主政治は瓦解する。

読売新聞社企画委員 河野 博子

■**被災地・地方の視点欠けた論戦** 政治の側が設定した争点の議論に終始し、国民の知りたいことがほとんど引き出せなかった印象だ。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の被災地からみれば、震災後の選挙で各党がこぞって公約に掲げた早期復興と原子力政策の見直しについての総括は不可欠だし、地方には深刻化する人口減への対応など喫緊の課題が山積している。選挙権年齢が引き下げられて初の国政選挙だというのに、新味のない経済政策などを繰り返し聞かされるだけでは新しい有権者も失望しかねない。

福島民報社編集局長 早川 正也

■**このむなしさ分かりますか** 国の根幹の憲法をめぐり、改憲を明言せぬ安倍首相。立憲主義を軸に共闘しながら、自衛隊が合憲かどうかさえ、食い違ふ野党。本質論を避けてきた負の歴史を感じた。地方再生に向けた議論の低調さも、寂しかった。昨年の合計特殊出生率は島根県2位、鳥取県4位。伸び幅は1位と2位だ。だが、生まれ育つ

た子どもは、出生率が最低の東京都などに吸い取られ、人口格差が拡大する。悪循環の末、その数を基に地方の国会議員定数も減る。皆さん、このむなしさが分かりますか。

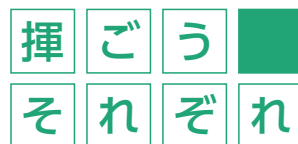
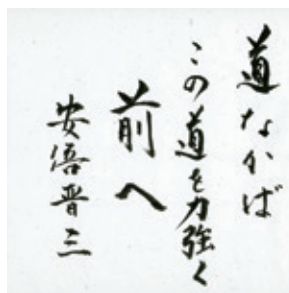
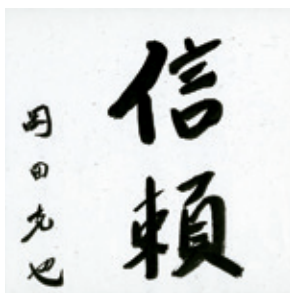
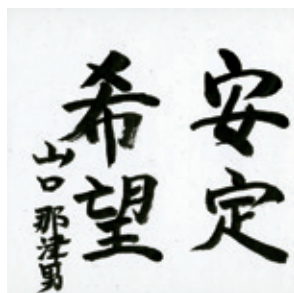
山陰中央新報社編集局長 壺倉 真司

■**「国のありよう」問う議論深まらず** 消化不良の感が否めなかった。アベノミクスの評価や社会保障の充実が国民が関心を寄せるテーマだが、国のありようを左右する原発や安全保障の議論がまったく深まらなかった。元米海兵隊の殺人暴行事件を受け、沖縄県民の怒りは限界に達している。日米安保の下、日本に駐留する米軍のプレゼンスをどう考えていくのか。安倍首相が触れた地位協定の改正は対症療法のレベルで、根本的な解決策にならない。「沖縄の問題」に矮小化せず、広く国政の場で議論すべきテーマだ。

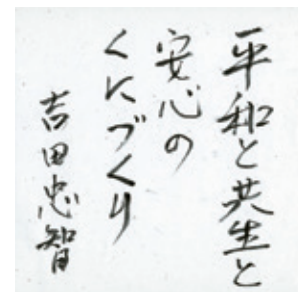
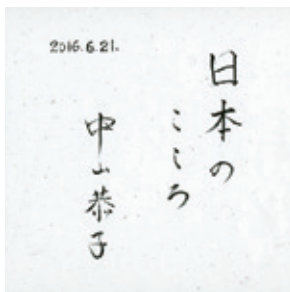
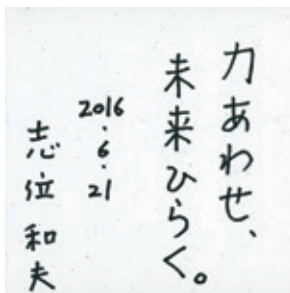
沖縄タイムス社編集局長 石川 達也

■**権力を持てばわがまま** 10年ぶりの東京勤務。興味深く選挙をフォローしている。日本記者クラブの討論会も新味が出てきた。与党の経済実績についてのPRは見え見えだった。野党に指摘された実質賃金の目減り、中小企業の苦難、貧富の格差拡大は認めたくないようだ。経済状況の認識に大きな差があった。その両方を合わせてこそ日本の本当の姿なのだろう。何よりも次にどういう政策をとるのか。日本という国をどこにもつていくのかを注視したい。「新しい決断」と言うだけで説明なしの約束反故は許されない。「権力を持てばわがまま」そのものだ。声東撃西のような、経済の旗を振って、憲法、安保をやるのはいかにも姑息に見える。

中国経済日報東京支局 蘇 海河



論戦前、  
並んでゲストブックに  
(9階会見場)



## 第24回参院選 9党党首討論会

### 実施要領メモ

▼日時…6月21日(火)13:00～15:10(公示6月22日)

▼出席者…安倍晋三・自由民主党総裁、岡田克也・民進党代表、山口那津男・公明党代表、志位和夫・日本共産党委員長、片山虎之助・おおさか維新の会共同代表、吉田忠智・社会民主党党首、小沢一郎・生活の党と山本太郎となかまたち代表、中山恭子・日本のこころを大切にする党代表、荒井広幸・新党改革代表

▼会場…10階ホール。直近3回の討論会と同様、左壁側に特設ステージを置き縦長に設営。

▼進行…第1部Ⅱ9党の代表者が「一番大事にしていること」を、ボード(控室で記入)を用いながら主張(持ち時間1分)。その後、代表者同士の討論。相手を指名して質問し、それに答える形式で(持ち時間各1分)2巡行った。第2部Ⅱ会場から寄せられた質問を参考者に企画委員会の代表が質問した。回答時間は原則、各1分とした。

▼総合司会…小栗泉、第1部司会…島田敏男、第2部代表質問者…橋本五郎、倉重篤郎、恵村順一郎、実哲也の各氏。いずれも企画委員。

▼過去14回の党首討論会同様、現役優先でプレス会員社に人数を振り分け



た。ペン取材158人。スチルは東京写真記者協会8社取材、外通6社と、在日外国報道協会(FPIJ)代表epa通信。参加総数は281人。

▼放送はNHKが総合テレビで生中継(ラジオも同様)。視聴率は関東3・3%、関西2・3%。民放はフジテレビが代表で中継取材。情報番組や夕方、夜のニュースで取り上げた。ENGはニュース映画協会代表テレビ東京、FPIJ代表AFPのほか国内8社、外通6社が取材。民放ラジオは国会放送記者会から4社が取材。カメラは、中継や党も含め、テレビカメラ26台、スチル20台の計46台が会場に並んだ。

## フィラデルフィア管弦楽団

「もうひとつの日中韓」をテーマに編成された日中韓米出身の演奏家が弦楽四重奏2曲を披露。今回は音楽教育の現場も視察、「私たちは文化大使」と話す。日中韓の外交関係を問われると、「受けたことがない質問」と当惑気味だったが、「国の垣根を越えられるのは音楽家の特権」と答え、「懸け橋」としての音楽の重要性を説いた。

■ 6・1(水) 記者会見／司会：石川洋企画担当部長／通訳：秋山賛／出席：95人  
8ページに写真と関連記事

## 榛沢 和彦 新潟大学医師



新潟中越地震以来、被災地でのエコノミークラス症候群対策に取り組む。「日本の避難所環境は欧米に比べ劣悪。血栓の発生につながる雑魚寝、車中泊をなくさねば」。段ボール製簡易ベッドを会場に持ち込み有用性を訴えた。「報道による注意喚起も効果大」とも。

■ 6・2(木) 研究会「熊本報告 エコノミークラス症候群対策」／司会：川村晃司委員／出席：37人  
8ページに関連記事

## 堀坂 浩太郎 上智大学名誉教授



ルセフ大統領の弾劾裁判でリオ五輪どころではないブラジル。「強い検察、強い最高裁、SNSでつながる中間層などの新しいアクターが登場した」と政治危機の背景を説明した。「メディアは調査報道で競争し、議会、裁判所が自前のテレビ局で審議を中継する」

■ 6・3(金) 研究会「リオ五輪を控えどこへいくブラジル」／司会：中井良則顧問／出席：49人  
10ページに会見レポート

## 野上 義二 国際問題研究所理事長兼所長(元駐英大使)



離脱派と残留派が拮抗する英国のEU離脱を問う国民投票(6.23)の2週間前に情勢を分析。「米大統領選より英国国民投票が心配です。英国社会が長い間抱えている問題が一気に出てきている。英国とは何か、を問うアイデンティティ政治であり、文化的対立でもある」

■ 6・10(金) 研究会「Brexit」／司会：鶴原徹也委員／出席：87人

## 横江 公美 元米ヘリテージ財団上級研究員



トランプ登場と米国社会の変容を「世代論」を軸に語った。変化のシンボルはデジタル・ネイティブのミレニアル世代という。「日本人が思い描くアメリカはもうない」。ヒラリー対トランプの本選は「オバマ人気を考えるとヒラリー、でもテロが起きればトランプ」。

■ 6・10(金) シリーズ企画「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選」⑧／司会：川村晃司委員／出席：78人

## 浅川 雅嗣 財務官



現役財務官が話題の「パナマ文書」を語るとあって100人以上が出席。グローバル企業の税逃れに対応するため、自身がOECD租税委員会議長となって推進してきたBEPSプロジェクトを説明した。「小さいながらも(税制での)国際協調への第一歩」と評価した。

■ 6・6(月) 研究会「パナマ文書」①／司会：実哲也委員／出席：115人

## 奥山 俊宏 朝日新聞社編集委員(右) 澤 康臣 共同通信社特別報道室次長



「パナマ文書」報道に参加した2人の記者が経緯と取材方法を話した。「内容は言えないが興味はあるか」とのメールが全ての始まり、と澤さん。奥山さんは「上司と同じ名前があって調べたが別人だった」。

■ 6・9(木) 研究会「パナマ文書」②／司会：坂東賢治委員／出席：88人  
9ページに会見レポート

## 仲谷 栄一郎 弁護士



国際税務が専門。「タックスヘイブンでの秘密保持は脱税などを契機に見直しへ動き始めた」「欧州企業は納税を社会貢献とアピールしているが、日本企業はアピール不足」。徴税をめぐるのは、規制整備とルール逃れの“いたちごっこ”が続いているという。

■ 6・14(火) 研究会「パナマ文書」③／司会：竹田忠委員／出席：51人

## 武内 和彦 国連大学上級副学長



緑化の専門家。アフリカなどで研究教育活動に従事してきた。「国連大学では多数のアフリカ人留学生が学んでいる。世界の課題は途上国にある。日本の若者にもっとアフリカに行ってほしい。現地での言語を駆使し底辺に住む人々を手助けする人材を育てたい」

■ 6・2(木) シリーズ企画「国連と日本人」⑧／司会：土生修一専務理事／出席：39人

## 平原 弘子 国連南スーダンミッション・ベンティウ事務所長



リベリア、キプロスなどを経てPKO 4カ国目。「あらゆる場所で人々と交流し、信頼関係を築くことが大事」「ずっと戦争状態で平和を知らない国の人たちに、平和の大切さをどう説くか」。中国の存在感は大きく「日本が行かないような危険地帯でも活動している」。

■ 6・16(木) シリーズ企画「国連と日本人」⑨／司会：原田正隆委員／出席：35人

**米川 正子** 立教大学特任准教授(右)  
**華井 和代** 東京大学大学院特任助教



コンゴ民主共和国で多発する性暴力。被害者の治療にあたるムクウェゲ医師の映画を上映後、2人の専門家が解説。「背景に鉱物資源をめぐる武装勢力の存在がある。鉱物資源は日本でも消費されており、日本のメディアはもっと報道してほしい」

■6・17(金) 記者会見・試写会「女を修理する男」/司会:土生修一専務理事/出席:64人

**柳興洙** 駐日韓国大使



大使着任以来の約2年間を見事な日本語で振り返った。「外交官は初体験。両国の首脳会談への環境づくりをめざした」。日本の国会議員との豊富な人脈を生かし調整役を務め、首脳会談が実現。「両国首脳に信頼感が生まれ、慰安婦問題も前向きな道筋がついた」

■6・17(金) 記者会見/司会:伊藤芳明理事長/出席:75人  
11ページに会見レポート

**呉士存** 中国南海研究院院長(団長)  
**于鉄軍** 北京大学国際戦略研究院副院長、副教授  
**張新軍** 清華大学法学院副教授

中国の海洋問題専門家3人が、南シナ海問題の歴史の変遷から、仲裁裁判の対応まで幅広く論じた。呉院長は「中国は仲裁判断を受け入れないが、国連海洋法条約から脱退はしないだろう」と推測。南シナ海の防空識別圏については「脅威がないので設置しない」とこちらは明言した。

■6・24(金) 記者会見/司会:坂東賢治委員/通訳:陳羚、樺博信/出席:75人  
11ページに会見レポート

**小城 武彦** 日本人材機構社長



元通産官僚。官民両方で働き、昨夏、政府主導の人材派遣会社社長に。「都市部で実力を発揮できずにいる管理職を経営幹部として地方企業に紹介したい」「成功例を作りたい。まだこれからだ」。会社は2023年までに解散予定。「短期決戦」に勝負をかける。

■6・24(金) シリーズ企画「チェンジ・メーカーズに聞く」⑥/司会:安井孝之委員/出席:46人

**森 重昭** さん



広島でオバマ米大統領とハグして泣いた森さん。「誰の支援も受けず、広い太平洋に1人で釣りをしよう」。孤独な調査で米兵捕虜12人が被爆死した事実をつきとめ、しかも遺族を探し出した。「私の気持ちを大統領が酌んでくださった」。感極まる涙だった。

■6・24(金) 記者会見・上映会「ペーパー・ランターン」/司会:川戸恵子委員/出席:70人/会見詳録  
12ページに会見レポート

**村木 真紀** 虹色ダイバーシティ代表



性的マイノリティーが職場で生き生きと働ける環境づくりをめざし活動をしている。「2年前に比べ、採用や離職防止などでLGBTに取り組む企業が2倍近く増え“追い風”が吹いている。しかし、根強い差別や法的保障の不備など課題も多い」

■6・13(月) 研究会「LGBTと社会」②/司会:宮田一雄委員/出席:30人

**太田 資曉** NPO法人江戸城天守を再建する会会長(太田道灌第18代子孫)(左)  
**三浦 正幸** 広島大学教授



明暦の大火(1657年)で焼失した江戸城の天守を再建しよう。呼びかけに応え三浦広島大教授が復元図を初めて作り報告書を発表。「震度7でもびくともしない。木造技術の美しさ、強さがわかる」。太田会長も「世界都市にふさわしいモニュメントを」。

■6・13(月) 記者会見/司会:瀬口晴義委員/出席:64人

**野口 元郎** 国際刑事裁判所(ICC)被害者信託基金理事長



最高検検事だがハーグにあるICCの要職も務める国際派。「ICCの課題はアフリカ問題。アフリカを狙い撃ちにしていると反発が広がった」「侵略犯罪の規程が来年、発効する」「スリランカを訪問し和解に助言している」。報道されない大事な動きがあちこちに。

■6・15(水) 記者会見/司会:中井良則顧問/出席:15人

**ヘレン・クラーク** 国連開発計画(UNDP)総裁



年末に予定される次期国連事務総長選の有力候補者。ニュージーランド首相の経験もある。シリアなど地域紛争が深刻化しているが、「国連はなるべく早く介入することが大事」と力説。ライバルは多いが、「私が最適任と確信している」と言い切った。

■6・16(木) 記者会見/司会:宮田一雄委員/通訳:大野理恵/出席:32人  
10ページに会見レポート

**吉川 洋** 財務省財政制度審議会会長(立正大学教授)



結論明白。「増税先送りは間違っている。大義名分はない」。理路整然。「日銀の異次元緩和は失敗だ」「社会保障は格差拡大の防波堤。国民の安全・安心の基礎だ」。最後はユーモアも。「選挙後、総理は予定通り増税するというべきだ。これが新しい判断です、と」

■6・17(金) 研究会「消費増税再延期と日本の財政」/司会:倉重篤郎委員/出席:61人

## 民間税制調査会 記者会見

「民間税調」は納税者の目線で税のあり方を提言するという大学教授や弁護士らの組織。座長の三木義一青山学院大学長ら5人が、参院選にあたり3項目の提言を発表した。「消費増税は実施すべし」「マイナポータル利用で年末調整廃止」「金融取引税の導入を」。三木座長が「政党は逃げている」と批判したように、政治へのいら立ちも。

■ 6・30(木) 記者会見／司会：竹田忠委員／出席：49人



10階ホールがコンサート会場に  
名門フィラデルフィア管弦楽団の4分の  
1はアジア系の音楽家。政治家は対立する  
が、国境を越えた芸術は美しい音色を奏で  
る。ならば「もうひとつの日中韓」を聴く企  
画はどうだろう。来日  
した楽団の賛同を得  
て、クラブとしては珍  
しいクラシック演奏会  
プラス記者会見が実現  
した。昨年1月、シベ  
リウス生誕150年記

## 会見余話

念の演奏付き会見に続く、ミニ・コンサートとなった。  
● スイカをなめる  
2年前に着任した時から働きかけていた  
柳興洙韓国大使は離任会見となった。控室  
で「スイカをなめる、ということばが韓国  
にはあります。きょうは、そういうことで」  
と笑う。表面を触るだけで中身に触れない  
ことをスイカをなめる、と表現するらしい。  
とはいっても、最初で最後のクラブの会見。  
なめるだけでは終わらなかつた。赴任前、  
朴槿恵大統領から「2015年を新しい韓  
日関係の年にしてほしい」と頼まれた、と  
披露。戦後70年かつ国交正常化50年のダブ  
ル節目の年を意識して歩み寄りを探り、年



末の慰安婦合意にこぎ着けたわけだ。  
(事務局 中井)  
● 今度は段ボールベッドが登場  
榛沢和彦医師の会見では、熊本地震の避難  
所で使われた段ボール製簡易ベッドが会  
場に登場した。会見後に記者たちが上に乗  
って頑丈さに感心する  
場面も。  
5月の会見では、熊  
本地震で活用されたテ  
ントが会場に設営さ  
れた。百聞は一見に如  
かず。実物を持ち込む  
会見を今後も続けた  
い。(事務局 土生)

原田 謙介 NPO法人YouthCreate代表



学生時の議員事務所インターン  
を機に若者と政治をつなぐNPO  
活動を始めた30歳。学校で主権者  
教育にも取り組んでいる。ポイント  
は「ハードルを上げ過ぎない」  
「生徒に楽しさを感じてもらう」。  
今回の参院選には「政党は若者を  
子ども扱い過ぎ」と苦言も。

■ 6・27(月) 研究会「18歳選挙権」／司会：川上高志委員／出席：31人

松田 康博 東京大学教授



キーワードは「原則と柔軟性」。  
「台湾自立」の蔡英文と「1つの中  
国」の中国政府。互いに譲れない  
が、これまでの安定した関係も崩  
したくない。現状の兩岸関係を  
「宙ぶらりんの冷たい平和」と分  
析。蔡氏を「言い負けたことがな  
い交渉のプロ」と評した。

■ 6・27(月) 研究会「蔡英文の台湾」②／司会：坂東賢治委員／出席：59人

阿部 菜穂子 英国在住ジャーナリスト



元毎日新聞記者。英国の桜は一  
斉に咲き散る日本のソメイヨシノ  
とは違い、種類も開花時期も多様。  
その疑問が、英国に桜を移植した  
園芸家イングラム氏の業績調査に  
向かわせた。「彼の足跡を追う旅  
は日本再発見の旅でした」と桜染  
めのスカーフを巻きほほ笑んだ。

■ 6・28(火) 著者と語る『チェリー・イングラム 日本の桜を  
救ったイギリス人』／司会：福本容子委員／出席：33人

アントワヌ・レリス 仏ジャーナリスト



パリの同時多発テロで妻を奪わ  
れ『ぼくは君たちを憎まないことに  
した』を出版。「カラシニコフを  
手にしていなくても、私たちは弱  
くない。彼らが勝つことはない」。  
テロへの恐怖を乗り越える希望の  
ことばを探す。「憎しみの中で毎  
日を生きるなんてできない」

■ 6・28(火) 著者と語る『ぼくは君たちを憎まないことにした』  
／司会：杉田弘毅委員／通訳：臼井久代／出席：62人  
12ページに会見レポート

平田 直 東京大学地震研究所地震予知研究センター長



「熊本では、余震確率を出した  
後に本震があり気象庁は余震予測  
を出しにくくなった。ただM6弱  
程度の余震が起こる可能性は低下  
した」。「完全な地震予知はない」  
と繰り返したが、「南関東大地震  
は必ず起きる。自助・共助の防災  
教育が重要」と強調した。

■ 6・29(水) 研究会「熊本の教訓と首都の備え」／司会：山崎  
登委員／出席：77人

## 研究会「パナマ文書」

おくやま  
奥山 俊宏 朝日新聞社編集委員さわ  
澤 康臣 共同通信社特別報道室次長

## 前例のない記者連携が成果を生んだ



租税回避地（タックスヘイブン）の取引を暴露した「パナマ文書」には、日本人・企業名が約400記されていた。分析したのは日、米、イタリアに住む4人の記者だった。暗号メールを使って連絡を取り合い、朝日新聞、共同通信の2人が「胸襟を開いて協力し

た」。前例のない取材となった。6月9日の研究会には、海外に住む2人を含めて4人の「日本チーム」が勢ぞろいした。

「興味はあるか」のメール舞い込む  
発端は昨年夏、米国在住のイタリア人フリー記者、シッラ・アレッチさんが、かつてインタビューをした

「国際調査報道ジャーナリスト連合（ICIJ）」から連絡を受けたことだ。早稲田大に留学し、日本語が堪能なアレッチさんへの依頼は「パナマ文書」プロジェクトの日本担当になることだった。イタリアに住む日本通のフリー記者、アレシヤ・チェラントラさんと2人で日本の政治家、大企業、暴力団関係者の名をひたすら探した。

今年に入って日本人2人が加わった。ICIJ事務局が1月、奥山俊宏・朝日新聞編集委員にメールで参加を依頼。2月にはアレッチさんが旧知の澤康臣・共同通信特別報道室次長にメールを送った。「内容は詳しく言えないが、興味はあるか」

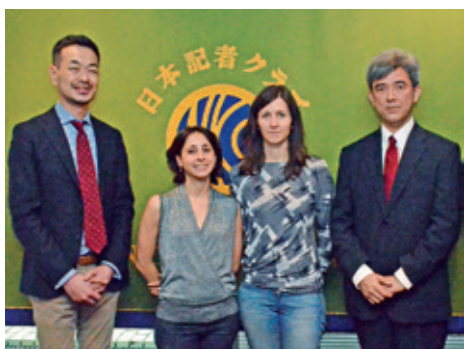
4人の中でICIJの会員は奥山さん1人だ。朝日新聞は奥山さんを窓口にして8年前にICIJと接触し、協力関係を築いた。奥山さんによると、2008年に上司から米国で台頭してきた非営利調査報道機関の取材を命じられ、通訳を伴ってICIJ事務局長らに面会した。奥山さんは翌年、アメリカン大に留学。ICIJと親組織の「セクター・フォー・パブリック・インテグリティ」（C

PIJ）を創設したチャールズ・ルイス教授の指導を受けたという。奥山さんは11年にICIJ会員となり、朝日新聞も12年に提携したICIJの記事を掲載してきた。

## 情報公開の壁高い日本

奥山さんはICIJについて「内部告発から記事を書き、それが内部告発を生んでパナマ文書報道につながった。ウィキリークスとは違い、入手したもの全てをぶちまけることはしない。公益性を考え責任ある報道をする」と分析した。

さらに、奥山さんは日本の記者に、外に目を向けることを呼びかけた。「海外には調査報道のコミュニティがあり、大会には記者が多数集まる。海外に向いて加わるだけでも



「日本チーム」はこの研究会前日に初めて顔をそろえたという。左から澤康臣さん、シッラ・アレッチさん、アレシヤ・チェラントラさん、奥山俊宏さん

存在感が増す」と話した。

共同通信の澤さんは調査報道の課題を挙げた。特に、日本で未整備の公文書を使う取材環境の変革を訴えた。情報公開法は行政が文書を「不開示」にできる範囲が広い。「個人情報」の壁も高い。さらに、欧米では調査報道の基本資料となる裁判記録の公開も、日本では限定されているからだ。

今回のプロジェクトは、記者が社を越えて協力したことが最大の特徴だ。澤さんによると、困難な対象を奥山さんと一緒に直撃することもあったそうで「競争と協力のバランスをどう取るか、何のための競争か考える機会になった」と話した。

調査報道でライバルと協力しているのか。澤さんと奥山さんは日ごろから取材方法の勉強会を開いてきており、信頼関係があつたからこそできたのだろう。筆者には他社と調査報道で協力取材をするイメージがまだ湧かない。海外ではなぜ可能なのか。取り決めを結ぶ必要はあるのか。課題が次々に浮かんでくる。

日本短期滞在中に、この研究会に顔を出したチェラントラさんは「調査報道、記者に国境はありません」と連携の強化を呼びかけた。

毎日新聞社社会部 青島 顕

堀坂 浩太郎  
上智大学名誉教授

## 無政府的に見えるが 着実に未来へ歩むブラジル

8月5日の開催まで間近となったリオデジャネイロ五輪。すでにブラジル全土300都市を回る聖火リレーは始まっている。ところが現場は「それどころではない情勢」だ。

かつて日本経済新聞社のサンパウロ支局長を務め、上智大学で研究を続けた、わが国のブラジル研究の第一人者が現状を読み解いた。3月の現地訪問で得た最新の情報も持つ。

「それどころではない」理由は①経済危機②感染症ジカ熱の脅威③現職大統領の弾劾④秋の地方選に向けて選挙運動がオリンピック開催時期と重なる、と4つもある。

好調だった経済が昨年、暗転した。人口2億人の国で失業率は10%を超え、さらに悪化している。2年前の選挙の後、初の女性大統領めがけて「ルセフ降ろし」旋風が渦巻く。きっかけは汚職の発覚だ。民主化を担った政党が汚職まみれだった。

能吏といわれたルセフ大統領だが、今や「聞く耳をもたない」と反発を買う。5月に大統領弾劾法廷の開設が決定し、テメル副大統領の暫

定政権が発足した。ルセフ氏自身は弾劾の動きをクーデターと見て徹底抗戦の構えだ。巻き返して留任する可能性もある。

混乱もあるが、長い目で見れば良い方向に向かっている。1980年代に軍政から脱却した新生ブラジルは中間層の拡大、国民参加の政治、経済の自由主義化を着実に歩んだ。皆保険など社会的な政策を進め、民主主義のベースをつくりあげた。汚職を法で裁く意識も根付いてきた。

現地ジャーナリストの「他の国民から無政府的に見られるかもしれないが、民主主義的に決定する方式を国として選んだ。未来はすでに書き下ろされている」という発言に堀坂氏自身、大いに共感しているようだ。

質疑応答で強調したのがブラジルの独自の道だ。BRICSと一口にいわれることをブラジル自身は嫌った。社会的な政策を進めたブラジルの労働者党政権は、社会主義を指向した中南米の国とは色合いが違う。

内政の危機と同時並行して行われるリオ五輪は「多民族国家にふさわしいイベントになる」と語る。ブラジルを「21世紀への挑戦への思いを秘めた国」と表現し、先進国の基準とは違った目で見るよう求めた。

朝日新聞出身 伊藤 千尋

## ヘレン・クラーク

国連開発計画(UNDP)総裁

### 国連事務総長選に剛速球

米国の大統領選ほど派手ではないが、国連でも今年、長丁場の事務総長選任プロセスが展開されている。現職の潘基文事務総長の任期が年末で終わるため、後任選任に新方式を採用し、候補者の公募と公聴会開催を導入したからだ。

その11人の候補者の1人。1999年から2008年まで、ニュージーランド首相を務め、09年4月に女性として初のUNDP総裁に就任した。経歴も実績も申し分ない。

世界はいま多数の課題に直面している。9億人が貧困と格差に苦しみ、環境問題も深刻、悲惨な紛争が続く、多数の人が開発の権利を奪われ、わ、速射砲のように繰り返される言葉にメモが追いつかない。意欲は経歴以上に申し分なさそうだ。



来日の目的は日本の支持を求めることだ。立候補には母国政府の全面的支持を受け、会見にもニュージーランドの外交官が同行した。

貧困と開発、地球温暖化対策、平和と安全保障、すぐには解決できない課題ばかりだが、国連は積極的に取り組むチャンピオンでなければならぬと力説し、そのためには「人間の安全保障に立った長期的な視点が必要」だと言った。「人間の安全保障」は日本外交が最も力を入れてきた分野でもある。

候補者は1人2時間ずつの公聴会で質問を受け、その答え方も事務総長としての資質を見る有力な判断材料になる。クラークさんの場合、4月14日に満員の会場で109の質問に答えたという。

7月からは安保理で非公開の協議に入り、秋には候補者を1人に絞って総会に提案する。少し知ったかぶりの質問を投げてみた。次期事務総長には女性を待望する声が強いが、一方で地域的に次は東欧の番という意見もある。この点はどう考えるか。

「立候補はそもそも全加盟国に対して呼びかけたものです。いま世界がどんな問題に直面し、その問題に対応できるかどうか。それが唯一の基準です。他の基準で選んでいたので、国連はいま、この世界に対応できません」。剛速球が返ってきた。

企画委員 産経新聞特別記者

宮田 一雄

Yoo Hamsang

駐日韓国大使

## 慰安婦合意、これからが重要

昨年12月28日に成立した慰安婦問題をめぐる日韓合意の「立役者」78歳の外交官の離任会見は当然ながら、ご本人の弁も質疑も、この合意に集中した。

日韓関係が「国交正常化以来最悪」とまで言われた2014年8月、朴槿恵大統領による突然の抜擢で「非常な緊張と負担感を持って」着任した柳興洙大使。日韓合意という見えないゴールに向かって走り続けた1年10カ月を流暢な日本語で振り返った。

国会議員交流の再開、6月の韓国外相来日と50周年記念日レセプション、11月の日韓首脳会談、そして年末の合意。交渉の表も裏も知り尽くした当事者ならではの回顧談が続いた。



「両国関係改善に向けて前向きな道筋がつくられた」慰安婦問題がこういう形で解決できたのは本当に

よかった」と声を強めながら「これからの履行が最も重要」と顔を引き締めた。「日本が10億円を拠出する際に」日本でどんな世論が起きるか心配だ。少女像撤去を条件にしたりすると韓国世論の説得が難しくなる。今は静かに耐えていくことが一番大事。韓国政府が関連団体と協議する雰囲気をつくってほしい」

幼い頃に日本へ来て小学校5年まで京都で育ち、京大留学を含めて日本滞在は3回目。「両国がどんなに近くて密接か、あらためて確信した。関係が深い国だからこそ問題が生じるのは避けられない。だが問題が起きた時、それを乗り越えよう、解決しようとする努力、精神、姿勢が互いになくしてはならない。自ら高いハードルを乗り越えた人の言葉は重い。

帰国後は「個人的に両国関係発展のために努力したい。もう1人の駐韓日本大使のような気持ちで」と笑わせ「日本について正しいことを知らない韓国人に勇気を持って論戦しながら、間違っていることは間違っていると話したい」と決意を語った。1987年以降、日本語で会見した駐日韓国大使は5人目という。しかし、ここまで言い切った大使はいなかったろう。

共同通信社編集委員 阪堂 博之

## 中国海洋問題専門家会見

南シナ海仲裁に  
あらためて断固反対

中国の南シナ海での主張と行動は国際法に違反する、というフィリピンの提訴を受けた仲裁裁判所（オランダ・ハーグ）が近く司法判断を示すのを控え、中国の海洋問題専門家が自国の正当性を訴えた。

「南シナ海問題は関係国の主権と海洋管轄権をめぐる紛争だ」。呉士存・中国南海研究院院長（右）はこう述べたうえで、「問題は話し合いで解決すべきなのに、一方的に提訴した」とフィリピンを批判した。南シナ海の平和と安定への中国の「努力」を強調し、各国から批判を浴びている人工島も国際社会への「公共財」と主張した。



京都大学で博士号を取得した張新軍・清華大学副教授（左）は「中国は決して仲裁を受け入れない」

としたうえで、受け入れなくても国連海洋法条約に違反しないとの立場を表明した。

東京大学に留学したことのある于鉄軍・北京大学副教授（中央）は「南シナ海問題はずっと日中間の問題ではなかったのに、日本が介入するようになった」と批判。今後の日中関係の試練となると指摘した。

質疑では、国連海洋法条約から離脱する可能性について、呉氏は「脱退する場合は複雑な国内手続きが必要だ」と述べたうえで、「条約にとどまって貢献していく」と話した。南シナ海に防空識別圏を設ける件については、「南シナ海で領海の基線を設定していないので、技術的に難しい」と語った。

中国南海研究院は南シナ海問題に特化した政府系シンクタンク。約70人の専任スタッフが活動しており、呉氏は内外で中国の主権を訴えている。日本のメディアがこの日の会見を伝えなかった一方で、同研究院のホームページは会見を速報し、多くの社が参加したことを報じた。張、于両氏も達者な語学力を生かして、海外での活動も多い。中国の宣伝活動のたくましさを感じざるを得ない会見だった。

朝日新聞社国際報道部 藤原 秀人

もり  
森 重昭 さん

## オバマ大統領の ハグに隠された意味

2016年5月27日、広島平和記念公園。オバマ米大統領は演説を終えると森重昭さんに歩み寄り、ハグして背中をさすった。その映像を見た世界の多くの人は、原爆を使つて無辜の市民を殺した米国の指導者が



米兵捕虜12人の被爆死をたった一人で突き止めた森さん

71年後、年老いた被爆者を抱きしめ和解に至った、と解釈しただろう。だが、あの光景はそんなにわかりやすく美しい物語の結末ではなかった。

森さんが語ったのは、米兵捕虜12人が被爆死した事実をいかにたった一人の被爆者が突き止めたか、という複雑で重く、聞く者の心を揺さぶ

るストーリーだった。

米軍は、被爆した捕虜はいないと長い間、否定し続けた。被爆者が描いた二千枚以上の原爆の絵を見ると、米兵を描いた絵が二十数枚見つかった。絵を描いた人に聞いて回ることから森さんの調査が始まった。

「誰の支援も受けず、たった一人で、外国に行かず、やってきた」

証人を探して話を聞き、米軍資料や日本軍がGHQに提出した文書の矛盾と誤りを見つけ、被爆死者の米兵12人を特定した。遺族を探し出し事実を伝えた。

「オバマ大統領は私の気持ちを酌んでくださった。やっとアメリカ政府が認めた」

被爆者の歴史家が調べなければ、12人の米兵が自国の原爆で亡くなった事実は埋もれたままだった。あのハグを感動の和解と呼んで美化するのは単純すぎるだろう。

森さんに続き、民間組織「捕虜日米の対話」東京代表の伊吹由歌子さんが、連合軍の元捕虜との交流を写真を紹介しながら語った。米兵捕虜の運命を証言でつづった森さんが主人公の米ドキュメンタリー「Paper Lanterns 灯籠流し」のプレス向け初の上映も行われた。

日本記者クラブ顧問 中井 良則

## アントワヌ・レリス 仏ジャーナリスト

### レリスさんからの贈り物

「ぼくは君たちに憎しみを贈ることはしない」

それは、パリ同時多発テロ犠牲者の遺族の理性的な声明ではなく、寛容さを保つ大切さや憎悪からは何も生まれないことをジャーナリストとして訴えたものでもなかった。

愛する妻エレーヌさんが自分たちの世界から突然いなくなったことを受け止めきれない心の叫びであり、じっとしていたら憎しみや怒りにさらされてしまう自分を抑えるために言葉を出したのだ。



息子を寝かしつけ、「妻が帰ってくるまで起きていよう」と考える場面から始まる彼の著書を読み進めていくと、そう思ってくる。フェイスブックへの投稿は事件の3日後。その間に彼

の気持ちは揺れ動き、居場所もなくさまよい続けている。会見でも「自分自身のために書いたのです」と語った。

フランス人が信条とする「自由」を幾度か強調した。「息子さんが犯人に憎しみを抱いたらどうしますか」との問いに、「自由でいられるよう、強くなれるよう、その方法をメルヴェインに与えていきます」と答えた。憎しみや怒り、恐れにとらわれたくないのは、何よりも心が自由ではいられなくなるからだろう。

質疑応答は、時に禅問答のようになった。最初は、そうしたやりとり戸惑ったが、次第に彼の言いたいことがのみ込めてきた。

すぐに道を求めようとしていないか、わかりやすい答えを欲しがっていないか。そして、私に何か教える乞おうという気でしょうか、と。

たとえば、欧州を覆う移民問題、難民問題への見解を求められ、彼はこう答えた。「完璧な答えがあったらどんなにかいいかと思う。だが、私も皆さんもジャーナリストです。『これぞ真実!』というのには疑ってかかる人間ではないですか」道を示すよりも、問い続けることが大切なのだと受け取った。

毎日新聞社論説委員 中村 秀明



## シンプルに直観する能力を研ぎ澄まします

尾崎真理子さん

「お国のため(戦争協力)への贖罪意識ではないかと本に書いたが、喜びも楽しみもあったのでは」と、その先駆的な仕事観や自立の意志の強さなどを指

摘した上で「本人も意識しなかった先見性」と評価した。後半は文芸記者編。村上春樹の『1Q84』や川上弘美の近作、津島佑子の遺作など同時代の作家を取り上げながら、「作家とは、直観力があり想像力を駆使し時代全体を引き受ける存在」と位置づけ、自らも「シンプルに直観する能力を研ぎ澄まし、同時代の重要な人に聞き、次の時代に伝えたい」と抱負を述べた。そして作品に託して、活字文化の重要性と復権を語る中で、石井の《いのちがけの仕事が「文化」の言葉を引き出したところに、単なる共感以上の今後に期す文芸記者としての尾崎さんの覚悟のほどを感じた。

用意した緻密な草稿を元に話を進めた尾崎さんに対して、「私は台本なしで」と切り出した堀川さんは、広島での民放記者12年とフリー12年の足跡をたどり、取材の醍醐味や面白さを歯切れよく語った。

「尾崎さんは小説家は現実世界の違和感を、私の言葉で言えば消化していく作業と言われたが、ジャーナリストはファクトを探し、積み

## 2016年度日本記者クラブ賞・同特別賞 受賞記念講演会

### 女性記者の受賞が増えそうな予感 千野 境子

今年度の日本記者クラブ賞を受賞した読売新聞社編集委員の尾崎真理子さん、同特別賞のジャーナリスト・堀川恵子さんの受賞記念講演会が6月7日夜、プレスセンタ―10階ホールで開かれた。

尾崎さんは講演

演の前半、受賞

対象である『ひみつの王国 評伝石井桃子』(新潮社)の中から終戦後、友人と宮城県で始めた農業・酪農の開墾生活の時代に焦点を当てた。

「お国のため(戦争協力)への贖罪意識ではないかと本に書いたが、喜びも楽しみも

あったのでは」と、その先駆的な仕事観や自立の意志の強さなどを指

摘した上で「本人も意識しなかった先見性」と評価した。

後半は文芸記者編。村上春樹の『1Q84』や川上弘美の近作、津島佑子の遺作など同時代の作家を取り上げながら、「作家とは、直観力があり想像力を駆使し時代全体を引き受ける存在」と位置づけ、自らも「シンプルに直観する能力を研ぎ澄まし、同時代の重要な人に聞き、次の時代に伝えたい」と抱負を述べた。

そして作品に託して、活字文化の

重要性と復権を語る中で、石井の《いのちがけの仕事が「文化」の言葉を引き出したところに、単なる共感以上の今後に期す文芸記者としての尾

崎さんの覚悟のほどを感じた。

用意した緻密な草稿を元に話を進めた尾崎さんに対して、「私は台本なしで」と切り出した堀川さんは、広島での民放記者12年とフリー12年の足跡をたどり、取材の醍醐味や面白さを歯切れよく語った。

「尾崎さんは小説家は現実世界の違和感を、私の言葉で言えば消化していく作業と言われたが、ジャーナリストはファクトを探し、積み



## 10年、20年後の誰かに向け爪を立てておく

堀川恵子さん

重なること、この1点」

「(仕事で)女として困ったこと、損をしたことはな

い。尾崎さんたち先輩が進路を開いてくれた」

「ラッキ―の1つは警察担当の3年間に尽きると思う」等々、記者としての原体験や信念、さらには満足感も伝わり、若手記者たちに聞かせたいような中身でもあった。

特別賞の『原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年』(文藝春秋)は気になりながら長く放置していたテーマで、戦後70年たち遺骨の身元探しを始めた。原稿に「形容詞を使わない」と決めた。「3〜4千度の熱さに焼かれるとはどういうことか。書けば書くほど嘘になる」から。遺骨には

沖縄の兵士や和歌山の看護婦もあり「日本の縮図が広島にあった」が、それは市史にもまだ書かれていない側面だ。

本を出して社会がすぐ変わるわけではない。「でも爪を立てておくと、

10年、20年後に誰かがやってくれるかもしれない」。「取材に終わりはなく、これからも続けてまいりたい」と決意表明のように講演を終えた。

質疑応答は割愛するので記者クラブのホームページにぜひアクセスを。

2人の有無を言わさぬ仕事ぶり

と、参加者の共感とがハーモナイズしたような会場。男女雇用均等法も支局勤務もサツ回りもない時代に記者となった筆者にとっても、女性記者の受賞が今後確実に増えることを予感させる愉快な一夜でした。

(ちの・けいこ 元産経新聞論説委員長)

【6・7(火)出席:94人(会員29人、一般65人)／動画／会見詳録】



53  
記者ゼミ

都道府県別の人口分布を地図上に色別で表示したり、熊本地震の震度データを地図上に落とし込んだりすることは、日々の業務で似たようなことをしていた。ただし、

今回は地理空間情報を視覚的に表示するという。前回、前々回と比べて内容がわかりやすかった。もちろんソフトのダウンロードにてござり、講義中もついていけずにはたびたび遅れてしまったが、何よりも地図にデータを反映させる行為とその成果が身近に感じられたのである。

紙と鉛筆を使った作業だ。しかも単純な数字に限られていた。このQGISを使うと、世界中にあるデータを使って、もっと面白いことができるかもしれない。勝手に妄想が膨らんでいった。

足と手を動かせばよい——。記者歴が10年を超えると、こうした固定観念から抜け出せなくなってくる。だが時代が変わってきていることに気がついていて。それに目を向けようとせずにはいたところ、記者ゼミに参加する機会をもらった。毎回、新鮮な発見と驚き、そしてもっと早く取り組めばよかったという後悔ばかりだが、これから始めれば何とかなるはずという期待感も少しある。

古山 和弘

\*GIS (Geographic Information System) 地理情報システム。位置や空間に関するさまざまな情報を、コンピューターを用いて重ね合わせ、情報の分析・解析を行ったり、情報を視覚的に表示させたりする。QGISはこの操作を行うソフトウェアで、インターネットで無料入手できる。

## G I S入門 固定観念からの脱却めざし 初めてのデジタル修行

6・7 (火) 講師：山本智・NHK報道局ネット報道部チーフプロデューサー／出席：38人

3回目のテーマは「初めてのGIS」。どれだけ初心者向けといわれても、毎回、私の理解力をはるかに超えた内容に思える記者ゼミの講義だが、ようやく聞き慣れないアルファベット表記を目にしても、うろたえなくなってきたような気がする。

旧ポル・ポト派のクメール・ルージュの大虐殺を題材にしたカンボジア映画「シアター・プノンペン」(2014年)は、郷愁の色を帯びた物語の幕開けから暗黒の時代へとさかのぼる。母と父、映画館の元主人らの愛憎が虐殺事件と絡み合い、カンボジアの人々の重い過去を浮き彫りにする。

古ぼけたスクリーンに、ヒロインが映し出される。クメール王国を舞台にしたラブストーリー。奔放な女子学生、ソボンが、廃墟となった映画館に迷い込んで見たものは、映画女優だった若き母の姿だった——。

## シアター・プノンペン



ラブストーリーに  
織り込まれる  
カンボジアの苦悩



企画したのは、同作品でカンボジア初の女性監督となったソト・クォーリーカーさん(42)だ。「海外からやってくる記者たちは主にクメール・ルージュの実態や情報を追いかけて、カンボジア人の内面に目を向けることはなかった」  
現地コーディー

### ★監督一家が来日

考えてみれば、日本も植民地支配時代は抑圧する側にあり、朝鮮半島分断の責任を問われる立場にある。カンボジアの街を背景にしたノスタルジックな映像に見入りながら、この国のありようを重ね合わせた。

日本での公開前の5月下旬、ソト・クォーリーカーさんが家族と来日した(写真)右がソト監督、筆者撮影)。東京の国際交流基金で、ソト監督と女優の渡辺えりさんとの対談があった。

映画のエグゼクティブ・プロデューサーは、ソト監督の夫ニック・レイさん(43)「英国出身」と母タン(68)さんらが務め「ほとんどファミリーマネーで製作した」と言う。「カンボジアはまだまだ男性中心の社会。女性がメッセージを伝えるのは難しい」とソト監督が言う。と、渡辺さんは「日本でも大変。監督がこのような映画をつくってくれてうれし」とエールを送った。「この映画はカンボジアの歴史と家族の物語ですが、現代の社会や豊かな自然の風景も見ることができます」とソト監督は話していた。

毎日新聞社会部 明珍 美紀  
©2014 HANUMAN CO., LTD.  
東京・品川ホールで上映中。ほか全国順次公開

英EU離脱 国民投票

梅原 季哉(朝日新聞社)

# 五里霧中のあぐく衝撃の結果 「内向き対応」にも苦慮

英国は欧州連合(EU)にとどまり続けるのか、決別して去るのか。6月23日の国民投票で示された民意は衝撃的な「離脱」を選んだ。

「独立した英国の夜明けが来ている」。24日午前4時(日本時間同日午後0時半)ごろ、EU離脱を党とする英国独立党(UKIP)がロンドン中心部で開いた集会で、フアラージ党首が「勝利宣言」に踏み切った。約半時間後、英テレビ各局が「離脱派勝利」と伝えた時には、窓の外はもうすっかり白んでいた。

## 6月に入り風向き変わる 世論調査も逆転

キャメロン首相が国民投票実施の方針を示したのは2013年1月。その後、昨年5月の総選挙を経て、今年2月にやっと投票日が設定された。公式に選挙戦が始まったのは4月15日。長丁場だった。

だが、実際に盛り上がりを見せたのはやはり終盤、6月に入ってから

だった。ちょうどそのころ風向きが変わり、残留派がずっと優位を示していた世論調査で、離脱派逆転の兆候が相次いで伝えられた。

英国はEUの中で、人口比で第3位、経済規模でみれば第2位という存在感を持つ。その英国がEUから抜けてしまえば、影響は計り知れない。危機シナリオがじわりと現実味を帯びた中、これまでこの問題に関心を払ってこなかった多くの読者からの「そもそもなぜ離脱を志向するのか」という、素朴な疑問に答えられるような報道の需要も高まった。

ただ、その時点では、必ず離脱と言いつけるかとなると、正直、五里霧中だった。14年9月のスコットランド独立住民投票や、昨年5月の総選挙で、英国の世論調査各社の最近の予測実績はお世辞にも的確とはいえないものだったからだ。

確実にいえるのは、予断を持つのは厳禁ということだけ。どう転んでも対応できるよう、粛々と取材デー

タを積み重ねるしかなかった。

## 海外メディア対応は後回し 単純でない構図伝える難しさも

困りダネの1つが、特に離脱派キヤンペーンによる「内向き志向」な報道対応だった。公式の離脱派団体の「顔」は、保守党内でキャメロン首相とたもとを分かつたジョンソン・前ロンドン市長。だが、彼の遊説日程を離脱派に問い合わせても、票につながる海外メディアへの対応は後回しにされ、さっぱりつかめない。同僚の一人は、離脱派サイトで見つけたためばしい集会に向うき、地道にウオッチを続けた。

英国社会は、良く言えば政治的多様性に富み、悪く言えば細かく分極



ロンドンのトラファルガー広場で開かれたコックス議員を追悼する集会。「同情票が残留派に流れ優位」との観測は空振りに終わった(山尾有紀恵・朝日新聞記者撮影)

化されている。与党保守党、野党第1党の労働党とも、残留、離脱に所属議員らの支持が分かれた。逆にいえば、両派とも寄り合い所帯であり、その意見はまだら模様で、単純に線引きできないケースも多い。それを日本の読者にわかりやすく伝えるのはなおさら難しかった。

最終盤には、残留派に属した労働党の女性下院議員、ジョー・コックスさんが選挙区で、52歳の男に射殺されるといふ衝撃的な事件が起きた。残留・離脱両派とも2日間、運動を自粛した。しかし、この事件の影響で、同情票が流れ、残留派優位に働くのではないかと、との観測は結果としては空振りだった。

ふだん4人の特派員が駐在しているロンドンには、投票日までに対応で欧州他地域と東京から4人の記者が現地入り。離脱の結果を受けて、さらに2人増強された。

キャメロン首相が辞意表明するなど英政界を液状化させ、世界経済にとっても激震となった英国のEU離脱。離脱条件をめぐるEUとの交渉はこれからで、今後とも目を離せない取材が続くそう。

うめはら・としや▼1988年入社 国際報道部 東京社会部デスクなどを経て 6月までヨーロッパ総局長 7月から編成局長補佐

## 舛添都知事辞職

清水 正樹(フジテレビ)

よみがえる2年前の苦い記憶  
『辞めて幕引き』は許さない

どこで道を間違えてしまったのか？ 華やかなセレモニーも花束贈呈もなく、幹部職員8人だけが見送る中、男は無言で都庁舎を後にした。男の名は舛添要一。

私たちの最初のスクープは幸運だった。追いかけていたのは絵画取引。追っていた取引相手から「ヤフオク（ヤフーオークション）の件？」という意外な話が飛び出した。よく聞いてみると舛添氏は絵画をヤフオクを通じて落札していたというのだ。しかも使用していたIDは本名の「Ymasuzoe」。私たちがこのヤフオク取引を報道すると、舛添氏はそれが自分であったと認めた。

タマゴサンドと出版社社長  
2つの疑惑を追え！

舛添氏は勉強家だ。だが、それが仇となった。あの第三者調査だ。調査結果を公表した弁護士たちは会見で「違法性はない」と繰り返し返した。法に反しなければよしとするかのよ

うなやり方、それが世論の怒りに火を付けた。私たちは取材チームを立ち上げ、この第三者調査に問題はないか検証を開始した。

注目したのは2つの疑惑。ひとつめは1万8000円も支払ったとする喫茶店の領収書の真偽だ。当の喫茶店を取材すると、タマゴサンド30人分という注文が事実であれば覚えているはずなのに、記憶はないという。私たちは実際にタマゴサンド30人分を作ってくれる喫茶店を探し出し、調理にはたっぷり2時間かかる「特殊性」を示してみせた。

次に舛添問題の核心、「正月に面会した出版社社長」は実在するのか？ 私たちはローラー作戦で元新聞記者が社長を務める出版社にたどり着いたが、肝心の社長は昨年秋季に死亡していた。ここまでかと思った時、その会社の登記簿の役員に名前があった女性を追跡すると、タマゴサンド30人分の納入先とつながった。彼女こそキーパーソンかもしれない

い。取材チームはこの女性を探し出し「出版社社長は名前を使われただけじゃない？」との証言を得た。死人に口なしなのか？ しかしそれを裏付ける証拠は得られなかった。どう扱うか？ 私たちはオンエア前日の夜まで弁護士を交えて検討し、一定の条件付きで報道に踏み切った。放送は6月12日。翌日には注目の都議会総務委員会が予定されていた。番組に出演した下村博文氏は取材ビデオを見た後、自民党も不信任決議案に賛成する可能性を示唆した。この発言は多くのメディアで報道され、これを境に都議会舛添辞職に大きく傾いた。

ライブルB誌と鉢合わせ  
徹夜で我慢くらべ

舛添氏が辞職したところから、世論の空気が変化を始めた。「いつまで舛添追及をするんだ。もういいので



「新報道2001」の番組画面から(フジテレビ提供)

は？」という声が聞こえてくる。果たしてそうなのかと思う。

私たちは一連の舛添報道を通じて反省していたことがある。2年前、舛添氏が政治とカネの問題を指摘された時のこと。私たちを含め多くのメディアは問題を追及しないまま放置してしまった。今回、舛添氏は何も語らず辞職した。このまま真相が明らかにされなければ第2の舛添問題が起きかねない。後任を決める都知事選は相変わらずの知名度優先なのだ。

紙面の都合上、そろそろ筆を置かねばならないが、最後に短く取材エピソードを。

今回、取材チームが居酒屋で関係者取材を狙っていたところ、男女3人組に遭遇。彼らこそ今回の舛添問題の火付け役となったB週刊誌の取材班だったのだ。夜7時半ごろからお互い粘りに粘って、閉店後の午前3時、両社とも取材に成功したが、放送日は私たちが若干早く、その数日後に発行されたB誌の舛添特集にあった居酒屋関係者の話はわずかな数行のみ。あの夜、彼らが流した汗に敬意を表したい。

しみず・まさき▼1990年入社 スーパータイム ニュースJAPANなど報道番組を担当 6月まで報道番組部長 現在 情報制作局局長

被災地通信④ 熊本地震

あの瞬間から3カ月  
テレビができることを見つめて

矢島 誠 (熊本朝日放送)

恐怖で足がすくんだ。4月16日の「本震」直後、「もうだめかもしれない」と、局に向かうことがためらわれたことを覚えている。熊本市内の自宅にいて激しく揺さぶられた。数日前から高熱でうなされ続いている10歳の娘の様子を見に、少しだけ自宅に戻っていた。不安におののく家族を残し、放送を続ける意味を自分に問い直さなければならなかった。

外に出ると、顔見知りの近隣住民も同じ不安の顔。「大丈夫だから。安心して。絶対、大丈夫」と声をか

けている自分がいた。こういう人のためにも「何が起きたのか正確に伝えなければならぬ。放送を始めなければ」と会社で足を向けた。

着いた局舎の様子は数時間前から一変していた。全館が停電していた。2日前の震度6弱の揺れに耐えたフロアは棚が崩れ、暗闇の中、無停電装置に直結しているモニター数台が弱い光を放っていた。放送を送出する副調整室を立ち上げること、そして取材団を編成し直し、スタジオから熊本県内、全国に向け地震の情報を出す。電気が回復するとともに、テレビ局としての機能を取り戻していった。

## 取材拠点、そして生活の拠点に

JR熊本駅近くの熊本朝日放送本社の停電は間もなく解消されたが、水道は復旧するまで1週間、ガスは10日以上なかった。テレビ朝日系列のANN取材団の本部が置かれ、取材班約30クルーを指揮する拠点となった。

取材団が出入りする通路横のロビーや会議室には、余震が続く中、住民約200人が身を寄せていた。「家の中にいるのが怖い」と、局舎に避難してきていた。その中で、総務局の社員は取材団への食料や宿の確保

に加え、住民への支援などにも奔走した。避難していた住民の中には、報道部員の家族も含まれていた。24時間態勢で取材、放送を続ける中、家族の無事が支えになっていた。

## 子どもの笑顔が一番

「前震」から1カ月がたった5月15日、九州朝日放送と特別番組を共同制作した。各地の住民が生出演やVTRで現状を語った。「子どもの笑顔が一番」「みんなで以前のように明るく過ごせたら」と、「日常」や「普通であること」をいとおしむ声が続いた。

VTRで紹介したが、こどもの日に子どものための催しを開いた大人たちの姿が印象的だった。復旧が思



くまモンも登場 九州朝日放送と共同制作の特別番組画面から (熊本朝日放送提供)

うように進まない町で、子どもの笑顔を最優先していたように思う。

## 長引く避難生活、多くの声拾いたい

地震から3カ月がたち、ニュースで始めたことがある。「避難所のいま」という週1回の特集だ。今も6000人が避難生活を送る中、毎回1つの避難所に注目し、できるだけ多くの声に耳を傾けたいと思っている。長引く避難生活で最も困っていることは何か。どんな気持ちで毎日を送っているのか。県民をつなぎたいと考えている。ある避難所では他の住民のために毎朝、コーヒーをいれている男性がいた。コーヒーを飲みながら交わされる普通の会話が避難生活の潤いとなり、住民同士の心をつないでいた。

ドキュメンタリーの制作にも取り組んでいる。「花で被災地に希望を」と奮闘する花屋の男性の取材を継続している。これも地域の絆がテーマだ。テレビが仲立ちしてコミュニケーションの絆の大切さを見つめ直し、復興に向かうふるさとの力になればと思う。人と人との強いつながりが必ず力になると信じている。

やじま・まこと ▼1993年入社 県政担当記者 ニュースデスクなどを経て2013年から報道制作局報道担当部長

# 赤道直下、密林と原野の南スマトラを歩く 熱帯農業開発に挑んだ日本人たちのたたかい

柴崎 信三



しばさき・しんぞう  
1946年生まれ 69年日本経済新聞社入社 文化部長 論説委員などを経て2007年退社 現在は獨協大 白百合女子大 早稲田大などで教える  
主な著書に『〈日本的なもの〉とは何か』(筑摩書房)、『絵筆のナショナリズム』(幻戯書房)など

高度経済成長で瀾漫<sup>びまん</sup>した「豊かな社会」が石油ショックでいささか陰りを帯びはじめたところ、田中角栄首相の金脈問題やロッキード裁判に追われていた遊軍記者は、いきなりデスクから「スマトラで日本の経済協力の現場取材してルポを書け」という指示をもらって慌てた。

スマトラといえば、かつて日本軍がパレンバン空挺作戦で油田を抑えた「空の神兵」が脳裏をかすめたが、いま振り返ればこの取材は、外交や戦争や国際テロなどとは違った意味で、辺境の現場から戦後の日本経済の陰面を見いだす旅であった。

インドネシア・スマトラ島南部のランポン州スリバオノ村。首都のジャカルタから頼りない双発機でおよそ30分、スンダ海峡に近いタンジュンカランに降りると、そこから四輪

駆動車で舗装されていない赤土の悪路をおよそ半日走った。

1976年秋のことで、めざしたのは三井物産を中心に日本とインドネシアの官民が協力して8年ほど前に発足させた大規模農場「ミツゴロ」である。

## ◆思惑一致で事業スタートだがその現実

ニッパヤシの生い茂る密林を切り開いた開拓地に4つの広大な農場があり、日本の商社とJICA(国際協力事業団)当時、現・国際協力機構)から派遣されたスタッフの下で、周辺の農村から集まる現地の若い男女がトウモロコシやキャッサバ(タピオカ)を育てている。

四季のない炎暑で焦がされた大地に突然、激しいスクールがやってく

る。それが目の前の川を瞬く間に濁流に染めたかと思うと、にわかに晴れわたった草原から一陣の涼風が渡る。褐色の川面を野生のワニが悠然と泳いでいる。ゲストハウスと呼ばれる自家発電の宿舎の小屋の片隅には、近くの原生林で開墾中に仕留められたというトラの剥製があった。

60年に吉田茂元首相がインドネシアを訪問した際、戦後賠償をからめて農業開発を通じた日本の経済協力を求められ、三井物産が民間の受け皿となつて、オランダ統治時代の独立義勇軍を母体としたコスゴロと合併で、スマトラに「ミツゴロ農場」の開墾が具体化する。開所式にはスハルト大統領夫妻も出席して華々しいスタートを切った。

人口の膨張に悩むジャワから不毛の荒野だったこの地域への国民の移

住を促し、その労働力で食糧生産を増進したいインドネシア側と、米穀物メジャーの動向に支配される国内の食糧供給の改善へ向けて、飼料用穀物の供給多角化をもくろむ日本の思惑が、この事業に結ばれた。

とはいえ、その8年後の現場で目の当たりにしたのは、ODA(政府開発援助)と商社プロジェクトという官民の枠組みの下で、熱帯の大地に「緑の革命」を進める日本人に立ちのどかた途方もない壁である。

風土を生かしてトウモロコシを年3回収穫し、輸出用の飼料穀物として世界の市場に出すという戦略は、雨不足とベト病といわれる熱帯の風土病で大きく目算を狂わせていた。やむなく農場はキャッサバやロゼラ(麻)との輪作を余儀なくされた。

「品種を熱帯用に改良して肥料も



農場で働く若者たちを乗せたトラックが密林の中をやってくる写真も掲載された紙面（1977年1月11日付夕刊／日本経済新聞縮刷版から）

風土に合うように開発したが、収穫量は目算を大幅に割り込み続けている」とJICAから派遣された山口文吉さん（当時64）は嘆息した。

三井物産からの出向でミツゴロの経営にあたる社長の木村幹さん（同46）は、創業8年でお赤字経営が続くこの事業の先行きに不安を隠さなかった。もちろん、熱帯の過酷な環境に加えて政府ベースのODAと総合商社の収益事業という、矛盾をはらんだ条件を抱える経営についての迷いがそこにはあった。

肝心の作物の収穫が思うにまかせないことに加えて、日本のODAで建設が期待されていた積出港までの

道路が実現せず、インフラの悪さが作物の商品価値を低下させた。

一方、人口爆発が続いて貧困の根が深いこの熱帯の途上国にあって、トウモロコシは国内の食糧に充てることが優先され、飼料穀物として輸出に振り向ける余力は乏しかった。当初、日本側が描いたシナリオが次々と頓挫するなかで、過酷な生活環境は日本から派遣されたスタッフたちにも困難を強いた。

妻子を伴って赴任している若い農業技術者は、幼子が発熱して医師の診療が必要となり、都会まで車で半日の道のりの悪路を飛ばさなくてはならなかった。マラリアの危険が常態化した風土であり、感染して命を落とした日本人社員もあった。

### ◆ 広がる「消費の目覚め」 地域社会に大きな刺激

こうしたなかで、現地人のスタッフや働きに来る近隣の地域住民たちは、この農場の開発とそれに伴う村落の生活の大きな変化を、おおむね歓迎していたことが印象深い。

「ゴトン・ロヨン」と呼ばれる相互扶助の文化が根強くあって、集落の請負労働になじんできた人々が農場の賃金労働で個人として収入を得るようになると、次第に地域社会に

消費への目覚めが広がった。若者たちは街へ出て流行のファッションを身に着けはじめた。

スリバオノ村の若い村長、シスワントローさんは「ミツゴロの農業技術は村全体への刺激となって、多くの農家がまねるようになった。大豆など村の産品をミツゴロが相場より高い価格で買い入れてくれたことも地域を豊かにした。道路や学校、水道など社会資本への援助を含めて、ミツゴロが地域へもたらしたものは大きい」と、その地域社会への影響を高く評価していた。

「ミツゴロ」に続いてランボン州には三菱商事が「パゴ」、伊藤忠商事が「ダイヤイトー」という同様の農業開発法人を立ち上げて穀物などの開発輸出へ向けた農場を展開した。しかし、いずれも積み重なる累損に耐え切れず、「ミツゴロ」と「ダイヤイトー」は83年、「パゴ」は84年に業務をインドネシア政府に全面移管して撤退した。

### ◆ 商社の時代に切り開いた地 豊かな農業生産拠点に

70年代から80年代にかけての日本は「商社の時代」であった。「ラーメンからミサイルまで」といわれる貪欲な市場へのアプローチは「日本株

式会社」の牽引力であり、資源・エネルギーや食糧をめぐる展開する海外の大型開発プロジェクトは内外から大きな関心が注がれた。

同じ三井物産が中心となって手掛けたイラン・ジャパン石油化学（IJPC）は、日本のエネルギー資源確保をめざしてイランの油田廃ガスを利用した石油化学事業だったが、中東戦争やイラン革命で破綻して「壮大な失敗」と呼ばれた。

「ミツゴロ」が切り開いたランボン州はその後、積出港への輸送路が整備され、移管後にその農法を引き継いだハイブリッド種のトウモロコシの産地として大きな発展を遂げた。いまではスマトラでも豊かな農業生産で知られる地域となった。

「森をひたした大きな湖水がある。人間をしらない原始林にすべてがつづいている」と、戦前にこの地を放浪した詩人の金子光晴は書いた。

3週間に及ぶ取材は国際面で7回の連載記事になった。当時、三井物産の社内では「無謀」とも「愚行」ともささやかれた南の島の「夢」の軌跡をたどると、40年前に熱帯の大自然とたたかったスタッフたちの深い溜息が聞こえてくる。

それこそが、この取材の「書かなかった話」である。

私が会った  
あの人

## 三陸臨時支局を支えた ホテル女将の気遣いと人柄

龍崎 孝（元TBSテレビ政治部長）

東日本大震災の発生からおおよそ1カ月、私は気仙沼に恒久的な取材と放送の拠点、つまり支局を設置、運営するよう命ぜられ、来た。電気、水、ガスはおろか放送設備を構築する家屋すらないこの場所で、どうすれば放送拠点を設けられるのか。妙案なく、これから始まる厳しい道のりを思っていた私の前に現れたのは、田村恭子さんだった。

津波と火災で大きな被害を受けた気仙沼の港を見下ろす高台にホテルが立っている。安全が確保されつつも、いつ再び発生するかわからない地震と津波を撮影するのにふさわしいロケーションを兼ね備えている。そのホテルの女将が田村さんだった。2011年4月12日と記憶している。このホテルの一角に支局を設けたいという私の要請に、田村さんは怪訝な表情

のまま尋ねた。

「どのくらいの期間ですか」。私が「最低でも1年」と答えると「はあ」と言ったり押し黙った。自身の家も津波で全壊し、黒いトレーニングウェアに首からPHSをぶら下げている。被災した従業員とともにホテル内で暮らしながら、救援に当たる機動隊や、電気の復旧に携わる電力会社のスタッフの対応に追われていた。まもなく被災者の避難所としてホテルを開放する準備も進んでいたころだった。私の申し出は迷惑の上なかったに違いない。

一晩明けた13日に再訪すると「決めました、どうぞお使いください」と言ってくれた。田村さんの気が変わらないうちに、と5月に予定していた支局の開設準備を翌日から進め、数日のうちに気仙沼湾を見下ろす和室は、放送機材で埋め尽くされる「ミニ放送局」に変貌した。放送

設備でびっしり埋まった和室に田村さんをお呼びした時の表情は、なんとも忘れがたい。「まあっ」と言っただけと笑い出したのだから。「こんなことになるとは。ねえ」

その日から1年、その部屋からニュースが発信されない日はなかった。JNN三陸臨時支局からは社会を揺るがすような特ダネはなかったが、一日一日の津波被害地の歩みが伝えられた。その全てが独自ネタだったと自負している。そして田村さんはその日以降、一度として部屋に

来ることはなかった。「皆さんの仕事場にうかがうことはあつてはならない」と思い続けていたのだという。どこで、何をやっているかを聞かれることもない。ただ、1日の取材や放送を終えて気仙沼に帰ってくると、エントランスで必ず待ち受けていた。「お帰りなさい。今日は〇〇にいらつしやうたんです、ね、放送、見ました」と笑顔で迎えてくれた。

気仙沼の県立女子高校を卒業し大学を出てから



田村恭子さん  
(筆者提供)

東京近郊で働き、結婚した。父親が営む水産・観光業の

業務拡大で新しいホテルを開設することになり、急きよふるさとに戻ってきたのだという。

慣れぬ女将稼業を続けているさなかに、東日本大震災に遭遇した。付かず離れずの対応ぶりは、女将としての気遣いと同時に田村さんの人柄そのものだったような気がする。傍から見れば「傍若無人」な放送局の仕事ぶりだが、その使命が全うできたのも田村さんのおつとりと、しかし都会仕込みの理解があつてのことだった。

自然の力は人智を超える。そうした力による被害を乗り越えていくのは政治や行政の力ではなく、そこに生きている人間の思いだ実感する。被災地における私たちの1年を、黙って支えてくれた田村さんの存在は、そのことをいつも思い出させる。

12年3月31日、1年の務めを終えて気仙沼を離れる私たちに田村さんは言った。

「泣きませんよ。いつまでも同じではいけないから」

（りゅうざき・たかし）  
次号は羽原清雅さん（朝日新聞出身）です。

マイBOOK マイPR

■空から降ってきた男

「アフリカ「奴隷社会」の悲劇」

小倉 孝保（毎日新聞社外信部長）

■アフリカ青年墜落死の謎を追う

ロンドンが五輪・パラリンピックに沸く2012年夏の朝、ヒースロー空港近くの路上で黒人男性の死体が発見された。アングラからヒースロー

に向かう旅客機から墜落死したのだ。男性はなぜ、ロンドンをめざし、旅客機から墜落したのか。その謎を追ったノンフィクションである。人種を超えた恋愛を通して見えてくるのは、欧州とアフリカに横たわる、あまりに大きな格差である。昨今の難民・移民問題を考える上でも参考になるはずだ。



新潮社  
1620円

■原子力報道五十年―科学記者の証言

堤 佳辰（日本経済新聞出身）

■先人の苦悩と決断

1953年12月7日、ニューヨークの国連総会でアイゼンハワー提案を直接聞いて以来、日本の原子力平和利用報道に一貫して携わった経験と所感を率直に

綴った。唯一の原爆被災国・日本が

ビキニ被ばくの直後、なぜ、いかにして第三の火を志したのか。先人たちの苦悩と決断を歴史認識しよう。

また、技術の欠陥は技術では正すのが王道で、津波に耐え得る原発、受動安全炉の実例を紹介した。石油皆無の資源小国、少子高齢化の日本が自ら技術を封印しては未来はない。



エネルギーフォーラム  
972円

■ゼロ戦特攻隊から刑事へ 友への鎮魂

に支えられた90年（西嶋大英 太田茂著）

西嶋 大英（読売新聞出身）

■少年特攻隊員の真実と心情

元警視庁捜査三課刑事・大館和夫氏（剣道七段）を、剣道の仲間である2人が

70余時間にわたって聞き取った。予科練から17歳で特攻要員となり、フイリピン、台湾で多くの死地を生き

抜き、8度目の特攻出撃寸前に玉音放送により生還した。記憶は驚くほど鮮明で臨場感にあふれ、少年兵が戦争の理不尽さを肌で感じとって

いく様子が、潔くもせつなく感じられるでしょう。



芙蓉書房出版  
1944円

■Governance of Urban Sustainability Transitions

水口 哲（個人D会員）

■日本と欧州の低炭素都市づくりを比較

国連気候変動枠組条約第21回締約国会議（COP21）で、世界全体の二酸化炭素の排出を今世紀末までにゼロにすることをめざす、パリ協定が採択された。世界全体で都市化が進むなか、ゼロ炭素化を今世紀半ばまでに達成しつつ、暮らしや経済もさらに良くしようと、具体的に取り組む都市が出てきた。そうした都市の実践と、実践を支える理論を紹介する書籍シリーズの第1巻。研究者とジャーナリストが、日本と欧州の比較を行った。著者から購入すると4割引。



Springer  
\$129

会員の皆さまが出版された本を「マイBOOKマイPR」で紹介します。狙いや内容などを200字程度でおまとめください。お問い合わせは事務局の村田茜（03-3503-2729、murata@jnpc.or.jp）までお願いします。

■会議報告

●第464回企画委員会

（6・6 10階Bホール）

参院選の党首討論会（6・21）の実施要領と、今後のシリーズ企画のテーマやゲスト候補などを協議した。また前月の会見で司会を担当した委員が会見運営なども含めて行事報告を行った。

出席 西村委員長、恵村、服部、倉重、福本、橋本、鶴原、脇、宮田、榊原、杉田、川上、軽部、山本、瀬口、原田、竹田、播摩、和田、梶本、橋場の各委員。

●第374回会報委員会

（6・15 小会議室）

6月号について意見交換した後、7月号の編集を協議、「ワーキングプレス」被災地通信のテーマを決めた。

出席 飯塚委員長、稲沢、大辻、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

●第466回会員資格委員会

（6・16 小会議室）

アフラックの法人賛助会員入会申請を含め、7月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 増田委員長、花谷、石田、新堀、山本の各委員。

## 情報発信

### ■第16回広島国際アニメーションフェスティバル2016 記者発表

同イベントは1985年、被爆40周年記念事業として創設されて以来、広島市で2年に一度開催されている。今年は8月18日から22日に開催する予定で、それに先立ち発表会見が行われた。(6.6 会見場)

### ■21世紀大学経営協会 総会・記念講演会

総会に続く記念講演会のテーマは「学校教育法改正の成果と課題」。常盤豊・文部科学省高等教育局長、平野俊夫・量子科学技術研究開発機構理事長(大阪大前総長)、高祖敏明・上智学院理事長らが登壇し議論を交わした。(6.9 10階ホール)

### ■「カンブリア宮殿」10周年記念パーティー

テレビ東京系列で放送中の、日経スペシャル「カンブリア宮殿」が番組開始から10年を迎えたのを祝して記念パーティーが開かれた。メインキャスターの村上龍氏、小池栄子氏ら関係者が集まった。(6.10 10階ホール)

### ■全日本プロフェッショナル競技ダンス選手会(ABDC)設立発表会見

ABDCは国内のプロ競技ダンス組織の選手会を取りまとめた新組織。これまでプロ選手会は団体ごとに分かれていたが、さらなるダンス普及や業界の活性化のため、「選手の大同団結」をはかるべく設立された。記者発表にあわせてトッププロダンサーらによるデモンストレーションも披露された。(6.14 10階ホール)

### ■公開討論「テレビ報道と放送法―何が争点なのか」

高市早苗総務相の「電波停止」発言や報道の在り方に関する議論の高まりを受け、異なる意見を持つ立場の言論人による討論会が行われた。登壇者は岩崎貞明・雑誌「放送レポート」編集長、小川榮太郎・文芸評論家、ケント・ギルバート・米カリフォルニア州弁護士、上念司・経済評論家、砂川浩慶・立教大教授、醍醐聰・東大名誉教授の6氏。(6.16 会見場)

### ■第67回かずみがせき佐賀会

佐賀新聞社主催。中央省庁の佐賀県出身者や同県内での勤務経験者がメンバーとなっている。『逆説の日本史』シリーズで知られる作家の井沢元彦さんが「キリストとイスラム」と題して講演した。約50人が参加。(6.16 会見場)

### ■日本エッセイスト・クラブ賞贈呈式

日本エッセイスト・クラブの総会后、同クラブ賞の贈呈式が行われた。同賞は新人エッセイストの発掘に努めている。第64回の受賞作は次のとおり。▶阿部葉穂子さん『チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人』(岩波書店)▶温又柔さん『台湾生まれ 日本語育ち』(白

## 新しいOB 会員

### ■太田 一彦



1976年日本経済新聞入社。総務局総務兼人事部長、製作局長、執行役員、日経プラザ&サービス代表取締役社長など。現在、同社顧問。

本物のニュースに触れると心が躍ります。いつまでも探究心を失わずにいたいと思います。

### ■谷 定文



1977年時事通信入社。編集局総務兼解説委員、編集局長、常務取締役など。現在、(一財)ニッポンドットコム理事。

日本の情報を7カ国語で、主に海外に向け発信しています。1年ぶりのクラブ復帰です。また遊んでください。

## 日比和解のモニュメント



6月18日、エルピディオ・キリノ元フィリピン大統領の顕彰碑除幕式が、在京フィリピン大使館主催で、日比谷公園で行われた。特別賛助会員のイグナシオ公使からこの計画を聞いた際、「モンテンルパ刑務所」に収容されていた会員がいたことを思い出した。故中侯富三郎さん(中日・東京新聞出身)で、クラブ会報「書いた話 書かなかった話」(2005年11月号)に戦後60年企画の一編として、そのことを書いている。

顕彰碑には、「日本人に対する憎悪の念を残さないために」と、同刑務所に服役していた日本人戦犯全員に恩赦を与えた元大統領の決意が刻まれている。

恩赦発表の翌月1953年7月に、「国民感謝大会」が日比谷公会堂で開かれていたことを今回初めて知った。碑は、そのすぐ脇に建つ。式が始まる前、渡辺はま子さんの「ああモンテンルの夜は更けて」の歌声がプレーヤーから繰り返し流れていた。(事務局 石川洋)

写真=元大統領の孫のルビーさんも参列し、謝辞を述べた。

\*中侯富三郎氏の「モンテンルパ、ベトナム、そして中国」はウェブサイトの会報pdf版で読むことができる。

水社)▶原彬久さん『戦後政治の証言者たち―オーラル・ヒストリーを往く』(岩波書店)。

阿部さんは表彰式前日の6月28日にクラブで会見した(ウェブサイトにて会見レポート)。(6.29 会見場)

### ■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる定例の勉強会。6月は茂木敏充・自民党選対委員長(6.8)、玄葉光一郎・民進党選対委員長(6.15)をゲストに招いた。

## レストラン\*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 文月懷石(7/29まで)

先付：鰻寿司、もろこし真丈ほか お椀：鰻葛打ち 造り：鮎、鰻、鰻湯引き 焼物：太刀魚塩焼き 煮物：冬瓜、石川芋など 揚げ物：米茄子ホワイトソース掛け 食事：そうめん(豆乳つけ麺) 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円) (板長：大井由光)

洋食 ミックスミートグリルコース(8/31まで)

マグロとアボカドのサラダ、冬瓜と蟹のコンソメ、ミックスミートグリル(ビーフ、ポーク、ソーセージ)夏野菜添え、完熟トマトシャーベット、パン、コーヒープッキ(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

## 8月はクラブ利用がお得です

毎年好評をいただいている夏の割引を今年も行います。8月中はレストラン・アラスカがディナーメニューを半額で提供するほか、クラブの部屋代割引、宴会プランの用意もあります。アラスカ利用は03-3503-2766、貸室は03-3503-2724にお問い合わせください。

## 開室時間短縮のお知らせ

8月15日～20日はクラブ施設と事務局の開室時間を午後6時までとさせていただきます。9階和食レストランはランチタイムのみの営業です。10階レストラン・アラスカは夜も通常通りご利用いただけますが、土曜は休業します。

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

## ■会見詳録 会員の全文文字記録版

- シリーズ「オバマ広島訪問」①「謝罪を求めることが核兵器廃絶の障害になるのであれば、ぐっと抑える」田中熙巳・日本被団協事務局長(2016.5.19)
- 「金正恩体制をどうみるか—労働党大会を前に」平井久志・立命館大学客員教授(2016.4.26)
- シリーズ企画「変わるアメリカ 変わらないアメリカ 米大統領選」③「ヒスパニック＝ラティーノとアメリカ政治」上英明・神奈川大学助教(2016.3.18)

## ■音声アーカイブ(日付は会見日)重要会見の音声録音

- アルビン・トフラー・アメリカ未来学者(1990.11.19)
- \*「音声アーカイブ」へは、クラブウェブサイトのトップページからアクセスできます。

## クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) ..... ☎3503-2723
- 洋食レストラン(10階) ..... ☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ ..... ☎3503-2724
- 受付 ..... ☎3503-2721
- 会員事務 ..... ☎3503-2727
- 経 理 ..... ☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み ..... ☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス ..... kaiken@jnpc.or.jp

## 会員現況

- 法人会員：134社 ●基本会員：746人 ●個人会員：1,314人
  - 法人・個人賛助会員：64社・141人 ●特別賛助会員：99人
  - 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：137人
- 計：198社・2,449人

## 第21回賛助会員の会を開催



企画委員のベテラン記者が講演し、賛助会員の皆さんと交流する賛助会員の会。今回は毎日新聞社の倉重篤郎専門編集委員が選挙情勢を含め、参院選後の安倍政権の課題や政局を展望した。進行役は日本テレビの小栗泉政治部担当部次長が務めた。

参加した中塚隆雄会員(産業競争力懇談会理事事務局長)は「読み切れない選挙の風や与野党共に組織力のある党と組む構造など、興味深うかがいました。メディアにはわが国の過度なポピュリズムを助長しない見識を期待します」と感想を語った。【7.1 出席：24人】

## 山形新聞社から初夏の便り

山形新聞社からさくらんぼをいただきました。「今年の出来は？」と聞かれた古頭哲・東京支社編集部長は「毎年、豊作です」とにっこり。今年もラウンジで会員の皆さんに召しあがっていただきました。

## &lt;法人会員代表変更&gt;

時事通信社 大室真生代表取締役社長(旧・西澤豊氏)  
徳島新聞社 米田豊彦理事社長(旧・植田和俊氏)  
中央公論新社 福士千恵子常務取締役グループ・メディア担当(旧・石井一夫氏)  
BSジャパン 石川一郎代表取締役社長(旧・小孫茂氏)  
中京テレビ放送 小松伸生代表取締役社長(旧・山本孝義氏)

<訃報> 高橋雄亮会員(NHK出身、85歳)が6月24日死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

## 7月の行事予定(7/5現在)

|     |                                                                 |
|-----|-----------------------------------------------------------------|
| 15㊟ | 14:00～15:30 9階会見場<br>研究会「タイ情勢」玉田芳史・京都大学大学院教授                    |
| 21㊟ | 14:00～15:30 9階会見場<br>シリーズ企画「沖縄から考える」⑫<br>我部政明・琉球大学教授            |
| 25㊟ | 15:00～16:30 10階ホール<br>記者会見 小和田恆・国際司法裁判所判事                       |
| 26㊟ | 15:00～16:30 9階会見場<br>著者と語る『デジタル・ジャーナリズムは稼げるか』<br>茂木崇・東京工芸大学専任講師 |

## 会報委員会

委員長＝飯塚 浩彦  
委員＝稲沢 裕子 井上 洋一 大辻 一晃  
大寺 廣幸 鈴木 仁 長崎 和夫  
藤井 良広 藤澤 秀敏 吉澤 正一  
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：小倉 健史 (時事通信社写真部)



陸上日本学生個人選手権の準決勝で出したタイムの前でポーズをとる桐生祥秀 (東洋大)  
= 6月11日 神奈川・Shonan BMWスタジアム平塚

## スーパーマンへの助走

桐生祥秀は、2度目の10秒01を出した後も、さほ  
ううれしそうな顔もせず、こう言った。

「10秒01はもう飽きた」

その言葉の意味を、彼を取り囲んでいたスポーツ  
記者たちは皆わかっていった。

陸上男子100mで、オリンピックのファイナリ  
ストになる。1932年のロサンゼルスオリンピッ  
クでそれを成し遂げた吉岡隆徳以来の、日本陸上界  
の悲願である。8人のファイナリストに入るには、  
9秒台の記録を出さねばならないという。桐生の  
「もう飽きた」という言葉に、居合わせた記者たちは  
彼の並々ならぬ決意を感じ取っていたのだ。

世界選手権はいかにも玄人向きの大会である。だ  
がオリンピックは大人も子どもも待っている。選手  
たちの一挙手一投足を世界中の人々が見守ってい  
る。日ごろスポーツ音痴のおじさんが、聞きかじり  
の知恵を披露し、素人が知ったかぶりの講釈をする  
のがオリンピックである。

もうそれ以上は人間には無理、と思われる限界の  
記録に人々は惜しめない拍手を送る。その先には一  
体何があるのか？ 限界の記録から解放されたと  
き、人々が思うのは「スーパーマンの世界」である。

その世界に、人間は立ち入ることができない。だ  
がその入り口でアスリートたちは1000分の1秒  
単位の記録を競う。子どもたちにとって、その姿は  
すでにスーパーマンなのである。

桐生の口から「飽きた」という言葉は2度と出な  
いだらう。そう信じよう。

(後藤 文生)